

全国大会レポート

開催年月日：平成 30 年 3 月 7 日～ 8 日

場所：宮崎観光ホテル

主催：厚生労働省、全国地域活動連絡協議会、一般財団法人児童健全育成推進財団

後援：宮崎県、公益財団法人児童育成協会、宮崎県児童館連絡協議会

主管：九州ブロック内各地域活動連絡協議会

開会式

主催者から厚生労働省子ども家庭局子育て支援課 川鍋慎一課長（当時）、一般財団法人児童健全育成推進財団 鈴木一光理事長、全国地域活動連絡協議会 小野マリ子会長（当時）がご挨拶しました。

続いて、来賓の河野俊嗣宮崎県知事、公益財団法人児童育成協会藤田興彦理事長、宮城県児童館連絡協議会稲田文事会長が紹介され、来賓を代表して河野知事に歓迎のご挨拶を頂戴しました。

全国地域活動連絡協議会表彰式

本年度は 51 名 7 団体が受賞し、大会に参加された 13 名 6 団体に対して表彰状が授与されました。受賞者を代表して愛知県尾張旭市みらい子育てネット瑞鳳の奥村紀代子さんが挨拶をされました。

行政説明 前掲 川鍋慎一 氏

冒頭に「地域の縁、絆の再編が必要な今だからこそ、発達期の子どもが十分な依存体験をして、人間への基本的な信頼感を育めるような人と人との交流が深まる活動をおこなうことが、地域組織活動の真髄ではないか」と投げかけられました。

地域交流の促進と子育ての先輩として期待

国では民生委員・児童委員制度、さらに児童福祉を専門に担当する主任児童委員制度があります。平成 12 年に児童虐待防止法が成立し、その後これまでに 6 回も改正されている中、児童虐待の防止は喫緊の課題です。児童委員・主任児童委員には、子どもの見守り、児童虐待等の予防、早期発見など、地域の身近な子育ての先輩としての存在が期待されていると語られました。

さらに、児童館で「小学生と乳幼児親子とのふれあい」を体験した小、中学生の感想や児童館職員が寄稿したメッセージを取り上げ、地域での多世代の交流が大切であることもお話しされました。

子どもにまつわる課題が山積し、あらためて地域交流の必要性が叫ばれる今、私たち母親

クラブも地域の子育て応援団として、地域のみんで子どもや子育て家庭を見守り支える環境をつくるために、子どもや子育て家庭が地域の方々と楽しく交流する機会などを作り、地域の中での繋がりを形作っていくことが重要であることを示唆されました。

記念講演「地域で子どもを見守るとは？ー子ども食堂の活動からー」

NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク 理事長 栗林知絵子 氏

きっかけはプレーパーク活動から

「豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク」に取り組むきっかけは、行政主導のプレーパークに関わる中で、「高校に進学できないかも」と悩む中3の男の子の学習支援を自宅で始めたことからでした。この男の子の場合、一緒に勉強しながら話を聞き、初めて困難な環境にあることを知りました。この経験から「やむない事情で家族の団欒を知らず経験がない子どもが、将来大人になって団欒がしてくれるのだろうか」「地域にはこのような目に見えないけど困っている子どもが他にもいるのではないか。それなら地域のみんながゆるく繋がって地域で育てよう。」ということからできたのが「豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク」だそうです。

学習支援や子ども食堂活動で地域も豊かに

彼の経験から小学校の勉強からつまづいていることが分かり、地域のみんで勉強をみてあげようということで、始めに「無料学習支援」がスタート。その1ヵ月後に「家庭で団欒を経験できないなら、地域の中でみんなで食べる経験ができたらいいいね」ということから「子ども食堂」がスタートしました。活動を通して、子どもを中心に地域の色々な人たちが繋がり、子どもが育つ家庭も含めて地域で寄り添っていくことができ、地域そのものの暮らしも豊かになっていることを感じているそうです。

日本の子どもの貧困の現状

「ひとり親家庭」の相対的貧困率(その国の大多数よりも貧しい状態)は特に高く、50.8%です。栗林さんは、少子化が進む一方で、困難を抱える子どもが増えているということは、この困難を子ども全体の問題として捉える必要があると思っているとのこと。また、日本は子どもの養育にお金がかかりにくい乳幼児の時点から貧困に陥っており、その子どもは年齢が上がっていった時に色々なことをあきらめるようになってしまうそうです。

さらに、無条件に大事にされるべき時期に、十分に大事にされる環境にないことが多いことが問題だと思っているとのことでした。このような境遇にある子どもたちに、できるだけ年齢が低い段階で社会的に投資をすることが、経済的な効率性が高いことも統計や研究によって明らかになっていることも紹介されました。

居場所づくりで子どもが地域を信頼するように

発達期に十分な依存体験をして、人間への基本的信頼感を育むことは重要であり、親ができにくい環境にあるのなら、地域の中で色々な人と関わって信頼関係を育むことができる

ように、居場所づくりを心掛けているとのこと。日曜日に親が働いている、孤立して子育てをしているなどの環境の家庭が地域に見守られながら育つ関係づくりをしている。子どもたちは「困った時には人に頼ればいいんだ」ということを体得していくそうです。

貧困対応だけではない地域みんなの交流の場

学習支援や子ども食堂の場には地域の一人暮らしの高齢者や大学生などの関わりもあり、地域のみんなで交流し、支え合う環境ができているそうです。子ども食堂は、現在全国に2,000か所程できていて、子どもの貧困の対応の場としてだけでなく、地域の繋がりをつくる場になっています。

パネルディスカッション「まちの子はみんなわが子！みんなの居場所について考えよう」

コーディネーター 前掲 鈴木一光 氏

パネリスト

前掲 栗林千絵子 氏

南九州大学人間発達学部子ども教育学科 准教授（当時）若宮邦彦 氏

大分県佐伯市鶴岡母親クラブ 事務局 富高国子 氏

1 回目の発言

鈴木コーディネーターの投げかけにより、「子どもの貧困」に対して私たちに何ができるか？という視点も持ってパネリストにお話をいただきました。

栗林さんは、記念講演の補足として、近年食べることをツールとして地域の繋がりをつくる取り組みが広がっていること、富高さんからは「つるおか子どもの家」の創設の動機、その運営に地域の色々な方が関わっていること、地域の乳幼児親子の広場や、児童クラブの子どもも地域の子どものも一緒に遊ぶ「遊びの広場」活動の展開をとおして、地域の乳幼児から高齢者までが自然に関りあっていることをスライドも交えて話されました。

これを受けて若宮さんからは、地域の繋がりが薄くなり、人と人との関わりの質が変わってきていることから、「孤独死」「孤立」「児童虐待」などが問題になっているのではないかと、SNSにより、たくさんの人と簡単に繋がりができるようになっているものの、母親クラブのような活動による繋がりをどれだけ社会に築けているのか、地域のそれぞれの活動が専門性の垣根を越えて協力し合うことが現在の地域活動に求められていることだと示唆されました。

2 回目の発言

鈴木コーディネーターは、発言を受け、人間が生物学的に赤ちゃんが独り立ちするまで長い年月を要するのは、どこに生まれるか分からない人間が、その環境に馴染んで生きていくために、先輩たちの生き方を身につける時間が必要だからで、そこには食の取り方、集団の中での距離感の取り方などがあり、その土地、土地による文化の差になっている。日本はこの文化が途切れてきているのではないかと。虐待も同様。どちらも社会的に遺伝する資質が高

い。これに気づいた時から対応していく必要があるのではないかと話された上で、栗林さんには、活動をしていて「こういうところは社会が変わればいいな」とか「こういう法律があればいいな」ということについて話を向けました。

栗林さんは、子ども食堂の旗を掲げると「お手伝いしたい」という問い合わせがたくさん来ることから、他人の子どもや地域の家庭等に関心があっても何かしたいと思っても、どこから関わったら良いのかが分からないという人がたくさんいることや、「おせっかい」といわれるかも知れないが、ボランティアや他人の子どもに関わることができる空気を社会の中に作っていく必要があるのではないかとということを語られました。また、あるひとり親のお母さんは、「何か手伝えることはない？」と聞かれると自分がみじめに感じられ、抵抗があったが「今になると関わってもらって良かった」と言っていることを取り上げ、子育ては全て親の責任という流れで来てしまっているが、みんなで子育てを支えていくということを広げていく必要があると話されました。

富高さんには、これからの活動の展望、展開していくにあたっての障壁について話が向けられました。

富高さんは、「子どもの家」を始めるにあたり、地域の区長さんなどに協力を呼びかけるもののたしなめられたこと、「協力しろ、協力しろ」と地域に言う前に、自分が地域の大人としてどれだけ地域のことに関わってきたのだろう？と気づけたこと、これからも「地域みんなの家」という視点を忘れず、子どもの居場所があることで、地域がみんなに優しく住みやすい場所になるんだということを届けていきたいと思っていることを語られました。

これを受けて若宮さんは、地域のために何かしたいと思っていて、そのチャンスはないかと探している人が多いこと、子ども食堂が貧困対策としてクローズアップされてきているが「子ども」という言葉を取り払い、貧困対策というイメージを払しょくし、福祉サービスを受ける時のみじめな気持（スティグマ）を取り除くために「地域食堂」「みんな食堂」という形で取り組みをしていること、子ども家庭支援や子どもの健全育成では、住民相互の互助が必要であり、地域ではこれまでも支え、支えられるということが行われてきている。このことをもう一度原点に戻って見つめ直すことが必要であり、お互いが無理なくできることをやるということが住民相互の互助と言えるのではないかと提示されました。

また、地域包括支援として、児童、障害、高齢に関わらない支援体制、連携の実践が行われる動きになっており、母親クラブも地域の社協、地域包括支援センターなどと連携していくことが、地域みんなでという実践に繋がっていくのではないかと示唆されました。

フロアからの質問

Q 子どもの家の活動は素晴らしいと思うが、運営はどのようにされているか？

富高さん

現在2クラブ 106名の児童が登録している放課後児童クラブ。土曜日は遊びの広場を開催して、登録児童以外の子どもと一緒に遊べるようにしている。火曜日の午前中は乳幼児の広場を開催している。職員は全員母親クラブの会員。現在、ほとんどの職員が「放課後児童

支援員」資格を取得済み。

Q 自分のところでは何ができるのかと考えながら聞いていた。自分の地域にも子ども食堂の活動はあるが、「子ども食堂」＝「貧困が知られてしまう」ということから利用しない子どもがいるのが現実。地域には企業がなく支援してくれるところがない。学習支援をしようと思っても大学がない。人口が少なく人目が気になったり、協力してくれる資源がなかったりの田舎ではどのようにすればいいのか？大都市だからできるのでは？

栗林さん

私たちも地域の人たちで活動しているのでお金はない。ただ、活動を始めると、地域のスーパーが果物を提供してくれたり、お肉屋さんが協力してくれたりするなど、地域のひとりひとりが「なにができるか」を考え始め、自分たちの街の居場所という意識に変わってくる。母親クラブの仲間以外にも町会などの色んなゆるい繋がりを持っているメンバーが集まることで地域を耕すことができる。「ない」中でも、少しの「ある」ことから何かを捻り出そうとしている地域のおとなの姿を子どもたちに見せることが大事。子どもたちのあきらめなければいけない境遇は、そんなに急激に変わることはないが、その子どもに対して、知恵を集めて何とかしようとしている地域の大人がいる姿を見せることで、子どもたちが「街に頼れるおとながいる」と思うことに繋がるのではないかな。そういう視点があってもいいのでは？

Q そういう視点は持っているつもりだが、地域がついてきてくれない。

栗林さん

だからこそ自分たちから繋がる、頼っていく、ネットワークをつくることが大切。皆でできることに取り組もうと少しずつ地域は変わってきている。今すぐはだめでも、ずっと考え続けていってほしい。

最終の発言

最後に、今後に向けてパネリストから一言ずついただきました。

栗林さんは、プレーパーク、学習支援、子ども食堂に続き、乳幼児を持つ家庭、妊娠期の家庭に「傾聴」に行く「ホームスタート」という事業を始めたこと、「子ども食堂」をプラットフォームにして、地域の子どものために地域で何ができるかをさらに考えたいと語られました。

富高さんは、「子どもの家」が始められるまでの2年間「協力が得られない」「どうしたらいいんだろう」と悩んだこと、先の質問に対して共感しながら、やろうという気持ちに溢れているのなら、やってみて欲しい。その地域の母親クラブにしかわからない地域の子どもの姿から、必要なことは何だろうと楽しみながら活動にしていくのが私たち母親クラブだと思っている。たくさん地域の親子に耳を傾けながら活動を進めていきましょう、と話されました。

若宮さんは、20年ほど前、富山市で惣万（そうまん）さんという看護師さんが始めた「このゆびと一まれ」という「富山方式」と呼ばれ、全国のモデル、先駆けとして注目された活

動を取り上げられ、今「居場所」ということが取り上げられてきているので、チャンスだと感じていること、さらに、「人がいない」「ボランティアがいない」といった場合に、今あること、できていることに注目することは大事であり、思いをどこかに伝えることで、繋がっていくことがあるのではないかと話されました。

また、「子どもの貧困」「孤立」「虐待」はどうやったらなくなる？とよく聞かれるが、「こうやればなくなるよ」という必殺技は、今は提示できない。ただ、地域の得意技を持った方がそれぞれの得意技を持ち寄ることで、必殺技になるかもしれない。以前から保健、福祉、医療のネットワークが大切だというようなことが言われ、今も言われている。裏を返せば未だうまく機能していないところがあるからではないか。だからこそ、単なる「繋がり」「リンクージュ」ではなく、新たな何かを生み出す「協働」「コラボレーション」といった「連携」「ネットワーク」が大切なのではないかと示されました。

最後に鈴木コーディネーターは、「子どもの貧困」が続くと、子どもが努力する意欲がなくなる、「希望」を持てなくなる、人に対する願望もなくなるということになり、これが意欲の格差になり、さらに文化の格差につながる。そのために地域の方はそれぞれの体験をもって寄り添い、生き方というものを折々に語るだけでもいいだろうと話されました。

また、居場所の定義は「主観」と「客観」の2つに整理され、「主観」は本人が居場所と思うこと。「ここが今日からあなたの居場所だよ」と言っても本人が居場所と思わなければ居場所ではない。そしてそこに「客観」的な条件として好きな人や自分を心配してくれる人がいること、もう一つが安心安全な物理的空間。この3点が揃って居場所と言える。子ども、地域の方が自ら選ぶ場所になっているかを確認することが大切とのことでした。

ユダヤ教の中に「タルムード」という教え、戒律が書いてある本があり、その中に「一人の人間を救うものは世界を救う」という言葉がある。「一人の人間を救った人は、世界を救ったのと等しい善行をおこなった」と褒め称えているそうで、この気持ちが大切であり、私たちが一人ひとりが一人の子どもを救ったら、かなりの子どもが救えるのではないか。そのようなことを考えさせてもらった実践報告だったと締めくくられました。

活動事例発表

若竹地域活動クラブ

若竹地域活動クラブは「子どもたちは地域の宝、まちの子はみんな若竹の子」を合言葉に活動されています。今回は、平成28年4月に発生した熊本大震災の被災地に対して、自分たちに何ができるのかを子どもたちと一緒に考えて行った活動を報告してくださいました。

色々と話し合った結果、寄せ書きと募金活動に決まり、子どもたちの意見を受けて、寄せ書き集めの計画を立て、募金活動を開始。子どもたちは話し合いをしながら募金箱づくりを行ったそうです。

寄せ書きのためのボードは苦労を重ねながら手づくりをし、夏祭り会場に展示してたくさんの方にメッセージを寄せてもらい、子どもたちも作成した募金箱を手にも会場を回り、熊

本に思いを寄せながら募金集めをしていたとのことでした。

熊本県庁に集めた募金と寄せ書きをどのように渡したらよいかを問い合わせたところ、知っているところがあれば直接渡した方が確実にとの返答をもらい阿蘇の小学校に直接手渡しに行かれました。そこで、震災の爪痕が残っている中でも、子どもたちの元気な姿に出会えたこと、その子どもたちの元気に先生方を始め、渡しに行った自分たちも元気をもらえたことを話されました。戻った後には、子どもたち、小学校、地域の方々に報告を詳細におこない、活動をとおして人と人とのつながりや支えあうことの大切さを感じ、今後の活動に生かしたいことも地域に発信しました。12月には阿蘇の小学校から、その後の子どもたち、小学校の様子を綴った手紙をもらったそうで、その手紙が披露されました。

この活動をとおして、子どもたちもクラブのメンバーも多くのことを学ぶことができたことと締めくくられました。

バズセッション「明日からの私たちが目指すもの」

様々な地域のクラブと情報交換ができるようにグループ分けをし、小野全地協会長が司会を務められてバズセッションを行いました。

1回目のトークテーマ「みんなの居場所づくりについて」

グループの主な発言

・多様な居場所があつてよいのでは？・みんなが行きたい、来たい場所・みんながくつろげ、楽しめる場所・支援者側の勉強も必要・とりあえずやってみることが大事・地域の繋がりをつくるために「おせっかいお婆さん」は必要・母親の勉強の機会も設けたい・精神的な寄り添い、情緒の共有からできるのでは？・母親クラブらしいすべての人を対象にした活動を地道に・予算がいるなど。。

地域を対象にした活動や居場所づくりにできることから取り組みたいという積極的な意見が多く出されるとともに、着手するための諸条件が整わず難しいのではないかと、「子ども食堂」=「貧困」のイメージが払しょくできないのでは、のようなためらう意見も聞かれました。

2回目のトークテーマ「居場所づくりと私たちの今後の活動について」

グループの主な発言

・母親クラブに若い会員を増やしたい・次の担い手を育成したい・マンパワーを大事にすること・自分たち自身の勉強会・コミュニティカフェ、サロンなど色々な人が居れる場所を作りたい・子育て中の母親の話を聞いてあげられる場所にしたい・母親クラブの活動を知ってもらうための積極的な発信・児童館とのいっそうの協働・中高生向けの活動（特に赤ちゃんとのふれあい事業）・地域の人々の得意技を生かした事業・他の団体との連携など。。

これまでの母親クラブ活動をベースにした、前向きな今後の活動への展望をたくさん聞くことができました。

みんなで作る サクサククッキー

バズセッションと並行して、高山宮崎県地協会長の指導の下、とても簡単で美味しくできるクッキーづくりをおこないました。各テーブルで生地を練り、オーブントースターで焼き上げると、会場はクッキーのいい匂いでいっぱいになりました。

閉会式

宮崎県地域活動連絡協議会の高山会長から、平成 30 年度の開催地宮城県の宮城県地域活動（母親クラブ）連絡協議会の佐々木とし子会長に大会旗が引き渡され、佐々木会長から次年度参加のお誘いの挨拶がありました。

最後に伊賀上恵子全地協副会長から閉会のことばがあって、2日間の日程が終了しました。